持続可能な社会の構築に寄与する資質・能力の育成に向けた環境教育

幌加内町立朱鞠内小学校　学級数４（１）　（校長　吉田　典弘）

Ⅰ　実践テーマの趣旨

本校は、校舎裏の国有林や広大な灌水面積を誇る朱鞠内湖を学習材として活用し、地域の関係機関と連携した自然体験活動を通して、自然環境の実態把握や環境問題について感受する機会をもち、持続可能な社会の構築に寄与する資質・能力の育成を意図した環境教育に取り組んでいる。

特に、低学年は、体験的な活動を通して自然環境に触れること、中・高学年は、教科等横断的な学びを通して自然環境の実態や自然を取り巻く課題を受け止め、自然環境への関わり方を具体的に思考することをねらいとして学習を行っている。

Ⅱ　実践の概要

１　「わんぱくの森」活動

本校の環境教育の主軸となる活動であり、森林管理署幌加内支署と連携し、通年で行っている。校舎裏の国有林を活用し、季節に応じた活動内容を計画している。

【国有林における森林調査活動】

【「わんぱくの森」活動例】

(1)　測高器等の専用機器を活用した森林調査活動
(2)　採集したドングリを用いた苗づくりと植樹活動
(3)　樹名票付け、鳥の巣箱設置、白樺の樹液採集
(4)　真冬の火起こし器による火起こし体験　等

２　朱鞠内湖を活用した自然体験活動

朱鞠内湖周辺の豊富な学習材を活用し、自然体験活動を通して、自然を取り巻く課題や自然からの恩恵について児童に考えさせる活動を行っている。

【自然体験活動例】

(1) イトウの採卵・受精の体験活動
　朱鞠内湖では、絶滅危惧種に指定されているイトウを繁殖させる活動が行われており、漁協及びさけます内水面水産試験場等と連携し、校区の母子里地区にある孵化場でイトウの採卵、受精体験を行っている。

(2) 朱鞠内湖の資源を活用した体験活動
　冬期の朱鞠内湖は厚い氷で覆われるため、ワカサギ釣りに多くの釣り人が訪れることから、ＮＰＯ法人ワールドセンターと連携し、ワカサギ釣りの体験活動を実施している。また、夏期は、ボートによる遊覧や島の散策、メノウ石採集など、朱鞠内湖の自然に触れる活動を行っている。

３　環境教育の学びをつなぐ各教科等での実践

環境教育を通して習得した知識及び技能が、日常生活において生きて働くものとなるよう、特別活動に「環境保全への実践力」を高める活動を位置付けている。

【「環境保全への実践力」を高める活動例】

(1) 環境美化意識を高める･･･日常の清掃活動、自治区クリーン作戦
(2) 環境保全を呼びかける･･･児童会による掲示活動（ゴミ捨て禁止ポスター、わんぱくの森看板）
(3) 環境を創造し整備する･･･学級園・学校花壇の計画、毎日の観察、収穫活動
(4) 人と関わる環境を創る･･･あいさつ運動

Ⅲ　実践の成果（○）と課題（●）

○　児童のすぐ手の届く場所に自然があり、身近な自然環境の中で体験的に実践したことにより、主体的に探究する意欲につながった。

●　自然環境が身近にあるために、その価値が見えなくなっていることがあることから、学習の中心となる指導事項や更に深めたい事柄について、教師が明確な意図をもつ必要がある。今後、学校の主体性を発揮し、地域との連携により学びを深めていくことが求められる。

別紙

持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）の視点を生かした学校運営

東川町立東川第二小学校　学級数５（１）　（校長　遠藤　友文）

Ⅰ　実践のポイント

○　ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）をグランドデザインに取り入れた学校運営

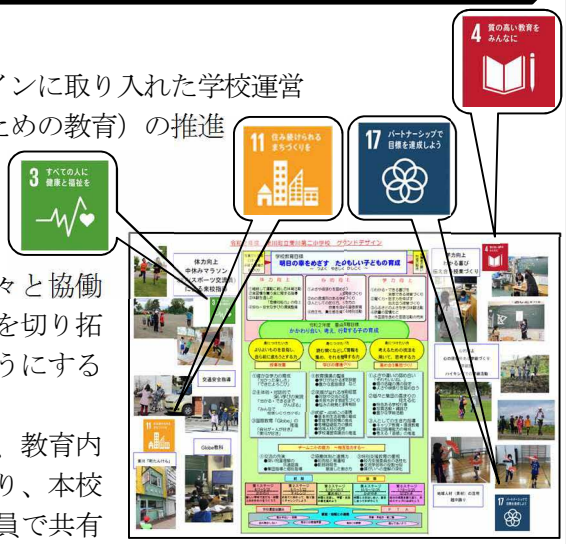
○　ＳＤＧｓを取り入れたＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）の推進

Ⅱ　実践の内容

(1)　ＳＤＧｓを位置付けたグランドデザイン

これからの学校には一人一人の児童が、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められている。

このために必要な教育の在り方を具現化するのが、教育内容等を組織的かつ計画的に組み立てた教育課程であり、本校では児童の未来を見据えたＳＤＧｓの理念を全教職員で共有するため、グランドデザインに位置付けた。



【令和２年度グランドデザイン】

(2)　ＳＤＧｓを取り入れたＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）の推進

教育はＳＤＧｓの目標４に位置付けられており、ＥＳＤは目標４の中のターゲット4.7に記載されている。「教育が全てのＳＤＧｓの基礎」とも言われており、特にＥＳＤは持続可能な社会の担い手づくりを通じて、17 全ての目標の達成に貢献するものである。本校では、ＥＳＤの取組をＳＤＧｓの観点から見直し、ＥＳＤの目標を明確化するため、様々な学習活動に17の目標を位置付けて取り組んでいる。

【ＥＳＤをＳＤＧｓの観点から見直した図】

① 実践１　第６学年「This is me. これがわたし」

ＣＩＲ（国際交流員）と本校児童が、出身国のお気に入りの場所をお互いに英語を使って紹介する。児童はＣＩＲの出身国であるプーケットの海の美しさに感動し、この海を守っていこうとする意識（目標 14）を高めるとともに、日本と他国との違いを多く発見することができた。

② 実践２　第２学年「町たんけん」

児童が校外に出向き、実際に町を探検して気付いたことや分かったことを地図上に示し、「ボクたちの東川地図」を作成する。地元である東川町の安全で暮らしやすい町づくり（目標 11）について理解をさらに深めることができた。

③ 実践３　全校「富山県魚津市の伝統芸能、越中踊り」

1997 年に「越中踊り子供保存会」を設立し、運動会やその他の学校行事で披露している。児童同士が振り付けを教え合うことはもちろん、家族や地域の人たちの協力も得るなど、立場の違う人たちが同じ目標に向かって協力する（目標 17）ことでよい踊りを創り上げることができた。

Ⅲ　実践の成果（○）と課題（●）

○　グランドデザインにＳＤＧｓを位置付けたことで、全教職員が共通の課題意識をもって実践を積み重ねることができた。

○　児童自身がＳＤＧｓの理念を理解し、国際社会の諸問題について積極的に考える姿勢が身に付きつつある。

●　今後は本校のこれまでの実践を集約し、成果と課題を整理して校外へ発信していく必要がある。

別紙

環境教育を中心とした「持続可能な社会の担い手」の育成

標茶町立中茶安別小中学校　学級数６　（校長　富田　和幸）

Ⅰ　はじめに

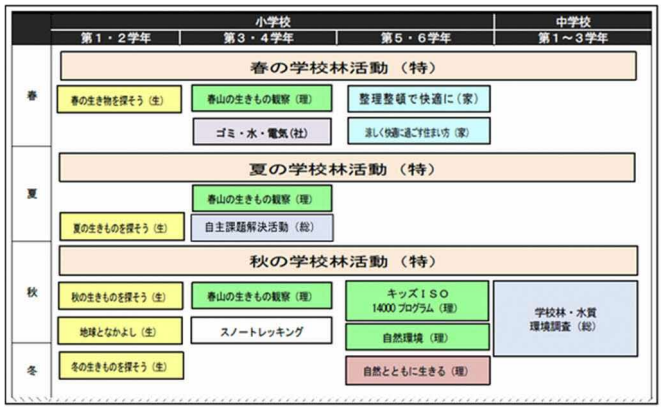
本校の特色の一つに、学校からおよそ２㎞の距離に位置する9.7haにおよぶ「学校林」がある。本校では昭和４年の開校以来、その恵まれた環境との関わりを教育活動の中核に据えることにより、児童生徒の豊かな人間性を育むことを目指した教育活動を展開してきた。平成24年にはユネスコスクールに加盟、小中９年間にわたる「環境教育年間スケジュール表」を整備し、「持続可能な開発のための教育（ＥＳＤ）」の取組を開始した。現在は、これまでの取組や「持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）」を踏まえた、「持続可能な社会の担い手」としての能力・態度の育成を目指した教育活動を推進している。

【持続可能な社会づくりのために必要な能力・態度】

○　「問題を発見する」「改善策を立案し実行する」「振り返りと修正を行う」で表される、問題発見・解決能力

○　豊かな自然を愛好し大切にする心情及びそれを守っていこうとする態度

○　エネルギーを大切にし、よりよい環境をつくり上げていこうとする態度



【小中９年間にわたる「環境教育年間スケジュール表」】

Ⅱ　実践の内容

１　自然環境の保全・維持の重要性に気付くための取組

学校林での、以下のような学習活動を通して、豊かな自然を愛好し大切にする心情及びそれを守っていこうとする態度の育成を目指している。

・小学校低学年～中学年　学校林及びそこに暮らす生きものと豊かに触れ合う体験的な学習

・小学校高学年～中学生　学校林が周辺地域にもたらす恵みについて理解を深める探究的な学習

・小・中学生全員　関係外部機関と協力した植樹や樹木を食害から守る「ツリーシェルター」の設置や樹木の生長を促進させるための下枝切りなどの体験的な学習

【ツリーシェルターの設置】

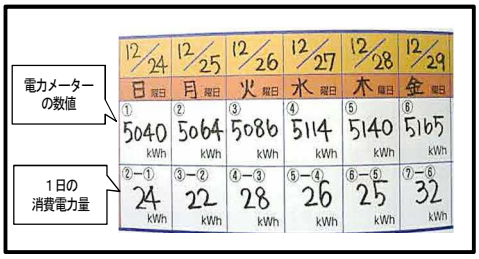
こうした取組により、学校林は健全な姿を維持しており、児童生徒は、学校林を学校、地域、そして自分の財産として大切にしていこうとする心情が育まれている。

２　持続可能な社会の在り方について考えるための取組

児童・生徒が家庭生活における節電・節水の方法について考え、実行することにより、問題発見・解決能力及びエネルギーを大切にし、よりよい環境をつくり上げていこうとする態度の育成を目指している。

特に小学校高学年の児童は、北海道が主催する「キッズＩSO 14000プログラム」に９年間継続して参加し、家庭における電力消費量等を削減するための作戦を立て実行している。

児童は、自己の取組結果が明確になることにより達成感を得て、よりよい環境づくりを目指す態度が育成されている。



【「キッズＩＳO14000プログラム」の取組ワークシート】

Ⅲ　成果と課題

○　児童生徒へのアンケート結果が右のようになるなど、ＥＳＤで育む能力・態度を設定し、「環境教育年間スケジュール表」を整備して指導することにより、持続可能な社会の担い手としての態度・能力を計画的に育むことができた。

項　目	評　価
□　地域の自然が好きである	（全校児童生徒）100%
□　「キッズＩＳO14000プログラム」を通じて、環境に対する「考え方」や「行動」などが変わった	（第５・６学年児童）100%
□　「キッズＩＳO14000プログラム」の取組後、今も続けている「作戦」がある	（第５・６学年児童）100%

【環境教育に係る児童アンケート】

●　ＥＳＤを位置付けた既存の教育課程を、ＳＤＧｓの 17 の視点から見直し、明確に位置付けていくことにより、より意図的・系統的な学習活動を展開する必要がある。